１．歌詞訳

World No More―このうえなく荒廃した世界―

＜世界がもうこれ以上･･･＞

私はこの地球の一員！！

愛と憎しみの世界に私はいる。
そこでは逃れることが人生の要領であり、
そこでは死が生活の糧だった。
＜富める者が金銭的に貧しき者に＞与える（施す）ことが弁明を許されない権利だった。
川を分割した橋が沢山ある世界に、私はいる。
そこでは川はただ途絶えのない流れで、その流れの中には化学薬品が覆いかくされていた。
私のいる世界では、空模様が公害の止り木になっていた。
留置所はたったひとつの解決策だった。
発言が殺人を引き起こし、そして若い者の声は届かない世界。
私は今、王と支配者の世界にいる。
そこでは、目に見えて正しいものが、本当に支配しているわけではない。
魂の自由―それは時が経つにつれて失われゆく。
私はもうこれ以上ない世界にいる。

私は今、富と貧困の時代にいる。
飽食と飢餓
休日の食事を分けて食べる人がいる時、どこかでは子供達が飢えている。
銃やナイフのようなおもちゃが子供の心を掴む世界。
そしてそんなおもちゃによって、サンタクロースの存在を信じるよう教えられる。
でも、決して、自分自身を信じることを教えない。
私はあなたを、あなた自身を大切におもっている。

私は秩序の世界にいる
そして混乱の世界にいる。
２つの（相反する）ものの境界を侵す者は、

即座に撃たれ、
安全は殺し屋の目を逃れる夜の闇だった。
私は光を放つためにやってきた。
我々はみんなでうまくやっていけないだろうか？
この世界にいるのだから
このこれ以上ない状態の世界にいるのだから。

何百万人もが行進し、
いろいろなドラム奏者に歌を歌ってきた２００の夏があった。

[　貧困と大多数の世界。
それと少数と最後の優先者達、との間にひかれた一線。
秘密女子学生社交クラブや会員制優先。
一方で高齢者の孤独死。
墓所が造られながら、壁が引き裂かれる世界に私はいる。
地球温暖化は警告だった、
終わりの日が近づいている、という。
しかし誰にもその警告は聞こえていない。]
無知のうちに、何も判らずに、
自分の身につけているものだけ、といって、
毒で髪を染め上げた、
そして大気に穴を開けた。
　オゾン層に穴を開けた。

私はもうこれ以上競技者でいたくない。
競技者である限り、心配で気に懸けることは点数だけだ。
私はこの世界の一員。
このこれ以上ない状態の世界にいるのだ。

２．歌詞の中の特に[　]部について、すなわち「富の分配・貧富の格差」について書かれた部分に着目して以下にレポートする。

『現在、地球上のあらゆる国々で、貧富の格差が拡大している。今日、４７０人の世界の億万長者の所得は、全世界人口の半分に及ぶ貧しい人々の所得合計に匹敵しているという。
世界中を駆け巡っている巨大なドルと円の実に約 98%が株取引の場での

投機に費やされ、実際の生産のサービスのために用いられているのはわずか 2%にすぎないという。世界経済が賭博と化して、それは石油産業、軍需産業、麻薬密売へと広がっていった。金持ちは、以前にもまして下層の人たちの犠牲の上に生活し、下層の人たちは、商業の中心からますますとおざけられてしまっている。世界中のアグリビジネス（農業関連産業）や産業に携わる労働者は機械に取って代わられ、彼らの労働力は利潤をあげるために縮小化された。その結果、失業が増え、実質賃金は確実に下がっていった。』＜デイヴィッド・ワーナー　「いのち・開発・NGO」より＞

「World No More」の歌詞を読んだ時、以前読んだこの本の一節を思った。何度読んで知っても、私にとっては多少とも衝撃的な事実の言及であり、この一節を、Us3 は短い歌詞の中に、実に深い意味を封じ込めて綴っている、と思う。

私には日本の３人の兄弟に加えて、バングラデイッシュに兄弟がいる。それは World Vision（of Japan Overseas Christian and Cooperative Service；以下 JOCS）という非営利団体の活動を通してできた、遠い国のまだ見ぬ兄弟だ。幸い彼には実の両親がいる。

多くの国では、たとえ両親が働いていても、わが子を養えないほど賃金水準が低い。そのことを私はこの兄弟を通して知っていたため、よけい、歌詞の「poverty and majority」の部分で考えさせられたように思う。

そういった貧しい国では犯罪・暴力・麻薬・難民・自殺・汚職が増加している。そして社会不安が高まれば、政府はさらに抑圧的になるという。米国と同様、貧しい国々では、自分たちの家族を養おうとして、取るに足りないスリや麻薬仲介を行う人が増加し、刑務所はあふれんばかりになっている。また、自然資源は利潤を求める金持ちに略奪されている。人口増加をはるかに上回る世界の生産物の膨大な増加にも関わらず、今日、空腹の子供たちは以前にもまして増加している。そんな事実を知り、なんとかこの『富の偏り』をできないか、を思わずにおれなかった。こんな「World No More」な世界のために私にできることは何か、を思った。

そして、私は以前、JOCS の海外派遣ワーカーである中村　哲先生に教わった一言を思い出した。「医師になる君は忘れてはいけない。先進国の人々はすぐに医学の最先端の発展の恩恵に与ることができる、しかし発展途上国では未だに３０年前の医学の恩恵さえ受けられない人たちもいる。」というものだ。思えば、この一言は私にとって忘れられない言葉であり、「いつの日か海外派遣ワーカーとしての道が備えられたなら、そう

ありたい」いう思いを私の中に留めさせるものである。
この中村先生の言葉から次のように思った。一部の人の富のためでなく、すべての人が等しく健康を享受でき、より公正で人間的で、参加型の社会をつくることこそ、世界中の人々の豊かさの共有への第一歩であり、そして健康の豊かさがもたらす、精神的な豊かさによって、社会秩序のある世界が発達すれば、「地球上の富の偏り」はよりよい方向へ変わりうる。そう私は思った。

だとすれば、世界の変化のために、豊かさのために、医療を通してできることは本当に大きいはずだ。そしてまだまだあるはずだ。中村先生の言葉の中に、私なりに、「世界中の真の豊かさの実現」に向けての解決策を見出した気がする。つまり、私が世界の豊かさのために、医療を通してまだまだできることがあるかもしれない、と思えた。

今、私の将来のヴィジョンの中に、「世界の人々の豊かさのためにありたい」という大きな夢がしっかりと根付いて加わっている。それは海外医療ワーカーとしての働きを通してさせていただける何かかもしれないし、国内での医師としての働きの中にあるかもしれない。どんなかたちであれ、このヴィジョンと共にありたいと、今は思う。そして願わくば、尊敬する海外医療ワーカーのように働かせていただきたいと思う。

「World No More」から、夢の連想がふくらみ、このようにいろいろなことを思った。こういったことを考えられる能力を身につけたいと思うことによって、医療の世界情勢や保健医療、公衆衛生の学びの重要性にも気づくことができたように思う。